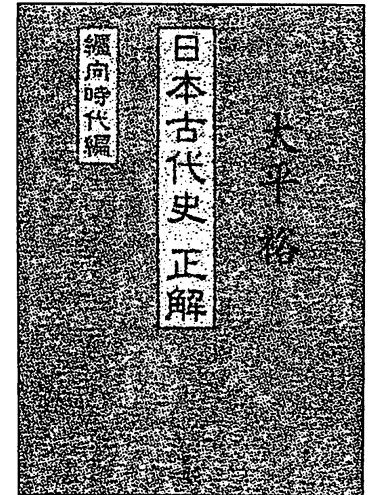


2010年7月4日 産経新聞より

## 日本古代史 正解 纏向時代編

大平裕著 (講談社・1995円)



評・渡辺利夫

(拓殖大学学長)

はるかに隔つ古代に、人はどうしてこうまで深い関心を寄せるのだろうか。古代の天皇の淵源を求めてその究明に飽くなき努力をつづける人は少なくない。

平川祐弘氏は本紙「正論」(2月18日付)において「天皇は敗戦後の憲法の定義では国民統合の象徴だが、歴史に形作られた定義では民族の永続の象徴である。個人の死を超え、世代を超え、永生を願う気持ちこそ天皇と国民を結ぶ紐帯である」と記している。かねて私の胸中において形にならなかつた感覚が平川氏により言語化され、雲が晴れたような気分である。

そうなのだ、天皇とは民族の永続の象徴なのだ。だからこそ、人は日本人として生きて今ここに在ることの証を立てるには、原郷としての古代とその時代を統べた天皇への回帰の旅をつづけなければなら

らないであろう。

著者がエネルギーのすべてを凝集して本書のような研究書を仕立てたのも、おそらくはそういう思いのゆえだったのであろう。読みながら私は本書の中に引きずり込まれるような感覚を抱かされた。古代を立証せねばやまない著者の気迫に飲み込まれたことだったにちがいない。

津田左右吉氏は歴史学の碩学として崇められ、氏による「記紀」(『古事記』『日本書紀』)批判は手つかずのまま現在の歴史学にまで継承されている。津田氏の試みたことは「記紀」の文献学的批判である。これによって神武天皇と、つづく8代の天皇の存在が否定されたままである。

後世の史家の多くは津田氏という権威につながらる。彼らは「記紀」は天皇家による統治を正当化するために7世紀前半期に「造作」されたものだという津田氏の説を奉じて、科学的検証の対象から古代を切り捨ててしまったのである。

昨秋出土した奈良県桜井市の纏向遺跡の精細な研究によって、日本の古代史は血の通う人間の綾なす生きた歴史として甦るに違いないと著者は自信をこめて言う。纏向の地を舞台に国造りに精出した天皇家の人々に息吹を注ぎ込まんとする著者の筆づかいがしなやかである。